

いもの子の歌

障害者が地域で暮らし、働くために

●第5回 君の夢 君の思い

■味付けをわたしの仕事に

第2川越いもの子作業所ではお煎餅の製造・販売やうどんの製麺作業を行っています。下地義和さんは第2川越いもの子設立当初から働いている仲間です。自閉症と診断され、ある程度身辺のことはできませんが、自分の気持ちを表現することは苦手です。第2川越いもの子ではお煎餅の製造部に所属し、最初は焼き窯のベルトコンベアに煎餅生地を並べる仕事をしていました。ところが下地さんはソワソワして落ち着きがありません。さらに急に髪の毛が抜けはじめ、円形脱毛症と診断されました。下地さんは「〇〇がづらいだよ」とは教えてはくれませんが、でも、明らかになにかに困っていてそれがストレスになっているようなのです。職員は下地さんの作業所での生活全般を見つめ、作業内容に目を向けました。そして「もしかして生地を並べる作業がづらいのではないか」と考えました。生地を並べる作業はベルトコンベアが一定

の速度で動いているために「自分のペースで」というわけにはいきません。下地さんは一生懸命やっているのに、仲間から「もっと早く」とせかされてしまうのです。職員は下地さんのペースをいかにせる仕事を考え「味付け」の仕事にとりくむことにしました。

「味付け」は焼きあがった煎餅を醤油ダレに一度漬け込み、手動の遠心分離機を回転させて余分なタレを取り除く仕事です。この「一定のペースで、毎回同じ量だけ回転させる」のは結構むずかしく、煎餅の職人さんでも「長年の経験と勘が大事」と言い、これといった基準はありません。下地さんがとりくんでみると、一定のペースで回転させ、だいたいの同じ状態で回転を終了させてくれました。表情もよく、ニコニコしながら下地さんが煎餅をクルクル回転させます。それ以来「味付け」は下地さんの仕事として位置づきました。いもの子のお煎餅は全部下地さんの味です。お客様が「おいしい！」と言ってくださると、下地さんはうれしそうです。下地さん



▶筆者中央

第2川越いもの子作業所
小倉 崇

■人に仕事を合わせる

聞かせてよ 君の夢 君の思い 君の声
語ってよ 君の夢 君自身の思い
埃まみれの靴をはいて
閉ざされたドアを開けば
たんぽぽの花が わたぼうしになって
みんなのところに 広がってゆくよ

聞かせてよ 君の夢 君の思い 君の声
語ってよ 君の夢 君自身の思い
高鳴る胸を押さえながら
握りしめたこぶし開けば
凍りついた雪が 小川になって
みんなの所に 流れてゆくよ

聞かせてよ 君の夢 君の思い 君の声
語ってよ 君の夢 君自身の思い
絡みついたつたをほらい
噛みしめた口を開けば
山に向けた声が こだまになって
みんなの所に 響いてくるよ

聞かせてよ 君の夢 君の思い 君の声
語ってよ 君の夢 君自身の思い
君自身の思い

いもの子の歌「君の夢 君の思い」は、言葉にならない仲間の思いや心の奥底に潜んでいる小さな声に耳を傾け、それをみんなのねがいにしていきたい、そんな思いを歌にして

います。どんなに重い障害があっても「働きたい!」「もっと自分を輝かせたい!」「自分を価値ある存在として認めてほしい!」という仲間たちのねがいは、言葉にならなくても私たちに對するなんらかの「働きかけ」となって確実に響いてきます。

いもの子ではこの仲間たちの「働きたい!」という声にこたえていくために、「仕事に人を合わせるのではなく、人に仕事を合わせる」ということを大事にしています。障害があるから仕事ができないではなく、どうしたらこの仕事ができるだろうと考えていきます。この「どうしたら」がとても大切で、そのために作業の工程や道具を工夫しています。そこが職員の腕の見せどころです。

■やりがいのある仕事と語り合える仲間

第2川越いもの子の包装室では、今日も仲間たちがお煎餅の包装作業にとりくんでいます。仲間たちが青い作業着に着替え、一人ひとりが持ち場につき「それでは仕事を始めま



▶秤を使つての包装作業にみんなできりくむ

す」という部長の声かけで仕事が始まります。包装作業は袋にシールを貼り、お煎餅のグラムを量り、袋に入れ、乾燥剤を入れて、封をし、賞味期限の印字をして、最後に異常がないかを確認するという工程で行われます。

この工程すべてを一人の人が行おうとすると、障害のある人はどこかに苦手な工程があってやりきることができません。そこで工程を細かく分けて流れ作業にしていきます。すると必ず得意な仕事ができ、「この仕事は私にまかせてよ!」と自信をもってとりくんでいく仲間の姿が生まれていきます。

また道具も工夫しています。秤はかりを使ってお煎餅を60gずつに量っていく仕事は、秤の表示が「59g」と出ても、それが多いのか少ないのか理解するのが苦手な仲間たちがいます。また視覚障害の仲間はそもそも秤の表示が見えません。そこで、いもの子では音の出る秤を使って仕事をしています。秤にお煎餅を少しずつ載せていくと60gになったところで「ピピッ」と音が鳴るのです。こうしてさまざまな仲間が量りの仕事にとりくめます。

仕事をしているときの仲間たちの表情は真剣そのもので、作業中は仕事以外の話をする人はいません。

しかし、休憩時間になると少し様子が変わります。飛んだり跳ねたり躍りはじめの人、包装室を出て走って行ってしまふ人、冗談を言い合ったり、ちょっとしたいたずらをして職員を気を引いたり、にぎやかに過ごす仲間たちの姿があります。そこにやりがいのある仕事があつて、夢や思いを語り合える友だちがいる。作業所とはそういう場所でありたい



▲煎餅の味付け作業